

《第二発表文》【近代の宿命】（全集第二巻）から。

A(「支配＝被支配の自己」)・B(神に従属する自己) 二元論の歴史的展開

「歴史を持つ社会は、自ら回復しえぬやうな病ひをけつして背負ひこまない。歴史の意識をヨーロッパにはじめて植ゑつけたものが中世であり、その基督教にほかならなかつた。ギリシャに歴史はない。——絶対者のないところに歴史はありえないのである。統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を付与する。(即ち以下の構図の変遷)とすれば、ぼくたち日本人がヨーロッパに羨望するものこそ、ほかならぬ近代日本における歴史性の欠如以外のなにものであらうか」(全二 P460)：括弧内は吉野挿入

「統一性と一貫性」・・・とは、下図における三角図と C(神・絶対)の不動と言ふ事。そして AB 分離線の下降(変遷)のみがあつたといふ事に、その歴史性(統一性と一貫性)の存在が証明されてゐると言ふことである。

(それに対して日本は、・・・については『文化とはなにか』を参照の程)

《以下、作図に際しての分類及び略号化》・・・恆存の「二元論」的捉へ方。

「支配＝被支配の自己」・集团的自我・「九十九匹」・実生活・政治・・・A
神に従属する自己・個人の純粋性・個人的自我・「一匹」・芸術・文学・・・B
全体・絶対・神・・・C
自己完成・自己全体化・自己主人公化・個人主義化・・・C'
宿命・神意・天命・秩序・文化・・・D1
信仰・自己劇化・演戯・自由意志・自己主張・・・D2
実在感・必然感・全体感・生き甲斐・充実感・・・D3

特に留意して戴きたいのは、以下三角図に於いて「AB」上下の分離線が、中世以後十九世紀に近づけば近づく程下降して行くと言ふ点です。

* 恆存原文を味はふ。『近代の宿命』* P431～434 (序文)

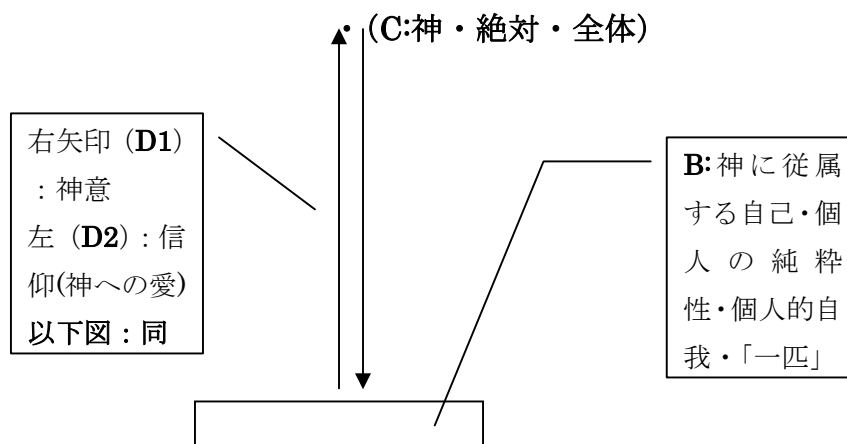
《一流(聖人賢者)と絶対・全体との関係》以下()内は吉野注

・・・神にのみ従属する自己(B:個人の純粋性・個人的自我)と「C:絶対・神・全体」とは一対一。(「支配＝被支配の自己」・集团的自我の不要)
イエス・レオナルドダビンチ(そして氏の願望の中にも。たしかある評論にその事が)
イエス・・・「神と二人きりであるかれ(イエス)にはもはや政治(支

配＝被支配の自己・集团的自我）すら不要であつた」全集：P 4 4 1
 ダビンチ・・・「かれ（レオナルド）は自然（全体）と二人きりで存在する」「かれにおいて神に従属する自己は、すでに神の支配下を脱し、おのずから個人の純粋性それ自体にまで昇華せんとする」

「イエスは——いや、イエスのみならず、多くの聖人賢者たちは、つねに個人であつた。純粋なる個人（B）にとどまつてゐた。イエスは弟子たちのまへにも、つねに孤独であり、かれらの肉体的権力者（A:「支配＝被支配の自己」）となることをかたく拒絶してゐた」

《一流（聖人賢者）と絶対・全体との関係》の構図



《中世》・・・精神主義（B主義）

*恆存原文を味はふ。*P439 単 93～441 : 94

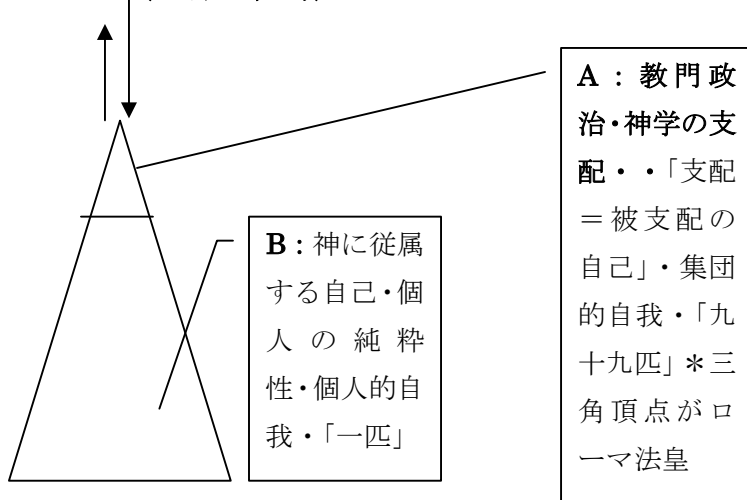
「パウロ以来の基督教神学といふものはイエスの無責任な、にもかかはら

ず偉大な放言の尻拭ひのために生れでたものにほかなるまい」

「そこでイエスと自分たちとのあひだに横たはるどうしようもない越えがたき溝を埋めんがために、神学の完成をめざした。(中略) 中世の偉業といふものが考へられるならば、それはまさしくこの点」 p 93

~~~~~  
《中世》・・・精神主義 (B主義)

・ (C:神・絶対)



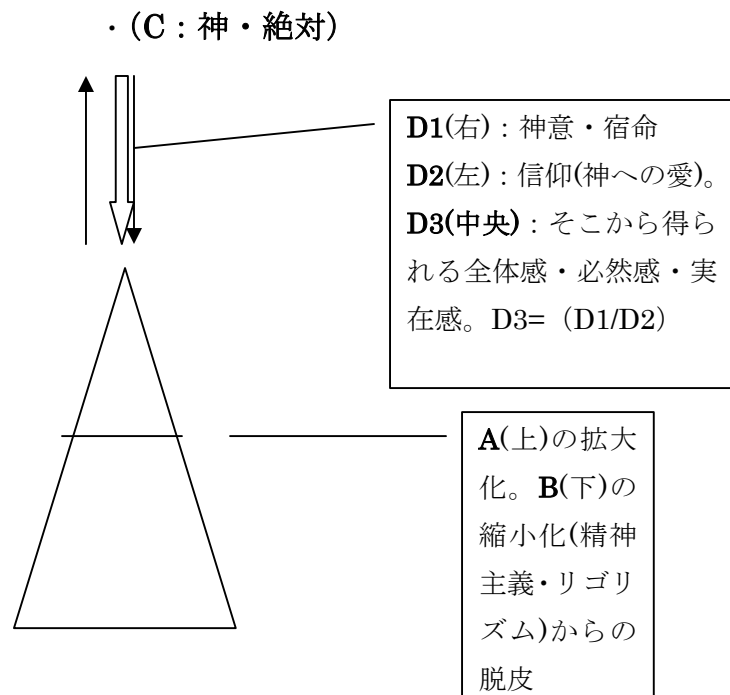
[中世における、基督教の精神主義・厳格主義(リゴリズム)]・・・

「支配＝被支配の自己 (A)」に対する教会の徹底管理 (教門政治)。

『肉 (A的: 吉野注) に従ふは罪。肉は神意の遂げ処。性愛は神の象りである人間を生み増やす手段』 (カトリシズム)

\*\*\*\*\*

《ルネサンス》・・・中世—神＝ルネサンス (思想家? : ジルソンの言)



中世が過ぎ、神 (C) が幾分希薄になつた分だけ、「支配＝被支配の自己 (A)」・集団的自我・「九十九匹」の領域の拡大化。

「肉に従うは罪」(中世) → 肉体性の主張 (ルネサンス) への変化：その時代的現象化としてシェークスピアのロマンティックコメディ。

しかし、シェークスピアの「天才」は、すでに「ルネサンス」の中に近代自我の孤独の萌芽を感じ取ってゐた。それが四大悲劇だと恆存は言ふ。

「昇騰してやまぬ想像力の自由な羽ばたきの (ルネッサンスの子としての) 影に何か黒い空洞 (近代の孤独感) があって、恐らく時折はそこを冷たい風がさつと通り抜けるのが感じられたに相違ない」と。(全 2 : シェイクスピア P 27)

\* 括弧は吉野注

備考：宗教改革 (十六世紀)・・・「ヨーロッパの資本主義を發展せしめた社会的主体は宗教改革の神に導かれてゐた」 P463：参照『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(マックス・ウェーヴァー)

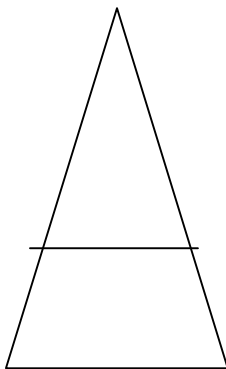
——— 此処までについての質疑応答 ———

~~~~~

《十八世紀》・・・更に神は希薄に。(分離線：「精神の政治学」線の下降化)

・ (C)

・ (C'') ← 前面に「自己全体化・自己主人公化・個人主義」の設定



「十八世紀が楽天主義の時代に見えるのは、個人の純粹性 (B) と「支配＝被支配の自己」 (A) とのあいだの調和に合理化がおこなわれうると信じてゐたためであつた。・・・いはば、個人と社会との対立は社会の側から解決されるといふのである。・・・ただ時が、文明の進歩がこれを解決するであらう——十八世紀が希望に満ちた楽天主義に蔽われたのも当然である」 P 5 4 8

〔更に神は希薄に〕・・・上記 (C) との間に (C'')：自己全体化・自己主人公化・個人主義) が設定される。

＊フランス「リベルタン＝自由主義者」の登場

・・・宗教・肉の支配・束縛からの自由。(ディドロやマルキ・ド・サド他)
「自由・平等・博愛」・・・觀念の束縛からの自由

＊フランス大革命・・・国家のカトリックからの脱皮(政教分離)

＊英国は既にヘンリー八世 (ルネサンス初期：エリザベス女王の父) の時にそれを実現。「英国国教」設立 (1534 年) により国教法王の上に国王を位置。
＝近代国家の成立。

注 《精神の政治学とは》・・・

「精神の政治学とは個人の純粋性と『支配＝被支配の自己』とのあいだに、それぞれの個性に応じた均衡を企てるものであるゆえに、もし社会（A）が自然のごとき合理性をもつてゐるならば、もはや政治学の用はなく科学がそれに代るべきである」（全2：P451『近代の宿命』）・・・

とは「社会（A）が合理性をもつてゐる」なら、科学で九十九匹（A）の問題はけりがつき、「均衡」は不要となりBの領域は消える。と言ふことだらう。十八世紀の楽天的「合理主義・科学主義」はそれを素朴に信じられてゐた時代。

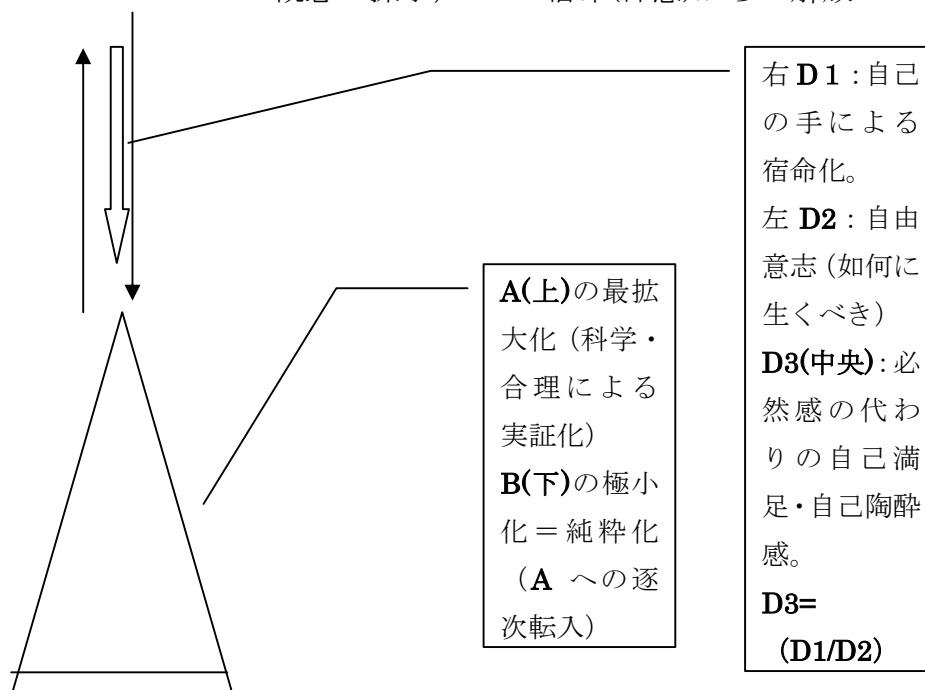
「いはば、個人と社会との対立は社会の側から解決されると」

《十九世紀》近代自我：個人主義と言ふ名の「動きまはる影・あはれな役者(マクベス)」 【西欧十九世紀構図（甲）】・・・分離線の最下降

* 恆存原文を味はふ。* P456 単 110～：458：112

・(C)・・・神（主人公）は背景へと遠ざかる。宿命(神意)からの解放。

・(C'') 個人主義（自己主人公化・自己全体化：神に型どれる人間の概念の探求）・・・宿命(神意)からの解放



「十八世紀が楽天主義の時代に見えるのは、個人の純粋性と「支配＝被支配の自己」とのあいだの調和に合理化がおこなわれうると信じてゐたためであつた。

十九世紀においてはその信仰が失はれてしまった」

「科学技術と社会制度の民主化との過程が進むにしたがつて、それまでの精神の領域（B 個人の純粋性：吉野注）に属し精神がこれを解決すべきだと信じてみた問題が、逐次物質の領域（A「支配＝被支配の自己」：同注）に移されて、物質の問題として解決されていった。物欲に克といふ克己の倫理（B の領域）も、十分に欲望する物質生産（A の領域）するといふことで解決されてしまふし、病苦に堪へるといふ美德（B の領域）も、医学の進歩（A の領域）が徐々にそのやうな精神の無益な負担を軽減しつつある」全 2：P453

と同時に、A の客体化（物質の問題として解決）は、以下の方向性をも齎す。「実証主義がかれらの自我のうちから追放した神に型どれる人間の概念の探求」へと。（全一：P637『現代人の救ひといふこと』）

即ち、制度による具体化・・・

「万人をその胸に救ひとる人格神が、その手をその脚を、さらにその胴体をもぎとられ、それらが制度化せられ機械化（A）せられる——で、神は人体を失つて、完全な精神としての抽象化を受ける。その精神が文学の領域（B）として残されるといふわけだ」

「近代ヨーロッパは神を見失つた——が、それはただ神の解体と変形と抽象化とを意味するに過ぎぬ。まさにそのための手続きであり過程にすぎなかつたヨーロッパの近代精神とその政治制度・経済機構（A）」それが上図と言ふ訳である。（P463・P466）

「実証主義は近代ヨーロッパに自我の平板さと無内容とをおもひしらせた。が、リアリストたちがさういふ近代自我に幻滅と絶望を感じたとすれば、ぼくたちはその絶望を可能ならしめたものとして、かれらの夢想してみた自我の内容の高さと深さとに想ひいたらねばならず、その背景に発見されるものは神でなくしてなんであつたらうか。そして十九世紀末葉から現代にかけて、かれらの精神が「現代人の救ひ」を求めつつ漂泊をつづけてみるとすれば、それは実証主義がかれらの自我のうちから追放した神に型どれる人間の概念の探求でなくしてなんであらうか」P637『現代人の救ひといふこと』

———此処までについての質疑応答———

日本「近代」（別紙乙図）との比較：（『近代の宿命』最終章の問題）

構図「甲・乙」の相違を認識せぬが為の「近代適応異常」。

・・・(例)「資本主義」「自然主義文学」

甲・乙の図でより認識できる明確な「近代」の相違。恆存はこの点を以下のやうに書いてゐる。(括弧内は吉野注)

「じじつは絶対に通用しえぬのに通用しうるかのごとき錯覚をいだいたことにまちがひがあつたのだ。ぼくたちはまず第一に、ヨーロッパの近代を本質的に究明して日本に真の意味の近代がなかったことを知らねばならぬ。第二に、しかもヨーロッパの近代を索引にしなければならぬ近代日本史をパラレル(上記例)にもつたといふ事情も同時に認めなければならない。第三に、この二つの事実を理解しえぬために生ずる混乱(「近代適応異常」)を徹底的に克服せねばならない」

「近代適応異常」・・・(例)「資本主義」(P462～463 参照)・「自然主義文学」
西欧では二つとも「甲図」の結果(実証精神)から出現してきたもの。
それに引き換へ日本の場合は・・・先進国化と言ふ模倣。

***逃避せずに非近代状況(乙図)に堪へた乃木将軍：旅順攻略戦**

(甲図)の象徴は、難攻不落の「ペトン要塞」。(参照：『乃木将軍と旅順攻略戦』)

「近代文学の問題」:

西欧と日本の「自然主義文学」にも見られる、構図「甲・乙」的異相

西欧十九世紀文学(リアリズム文学)

将にこの十九世紀の構図「甲」(近代自我：個人主義)こそ、フローベールの小説『マダム ボヴァリー』。以下、括弧内は吉野注

「リアリズム小説のあとではロマネスク(B)をおびやかすもの(A上の実証精神)はあつても、ロマネスクの存在する余地がなくなつてしまつた」(『小説の運命Ⅱ』)

「フローベールはもつと冷静に復讐の手段を考へだした。——個人の敗北を身をもつて敗北してみせること、可能性の天窗(B)は一分のすきもなく完全にとぎされ、現実世界(A)で獲得できた自由のいかにつまらなく、それがあまりにつまらぬために自由でもなんでもないといふことを、克明に描写し証明してやること」[「現代日本文学の諸問題」全1:P59]

その十九世紀型悲劇(個人の敗北=個人主義ヒロインの末路)の客体的表現が『マダム ボヴァリー』なのである。それ故に「マダム ボヴァリーは私だ」

といふ言が其処に表せられる所以がある。

(こんな点は恆存の「索引」なくして、小説を読んでも解かり得はしない事だ)

この構図(甲)の所を、近代自我(個人主義)の限界を、より詳しく次のやうに恆存は書いてゐる。

実証主義そして社会の合理化に追ひ詰められて詰め腹を切らされた、個人の純粹性(B:個人的自我)の「可能性の領域は圧迫され、狭窄になり、つひに絶無になつたとき、ひとびとはその代償として獲得できた現実世界における自由を、自分の掌のうへにみつめて、これはひどくつまらないものだ気づいたのである。こんな程度のもののために、可能性の夢を犠牲にしてきたとはばかばかしい。だまされた、と狂気のやうにわめきだした。ニーチェ(1844~1900)は気が狂つた。フローベールはもつと冷静に復讐の手段を考へだした。——**個人の敗北を身をもつて敗北してみせること**、可能性の天窓は一分のすきもなく完全にとざされ、現実世界で獲得できた自由のいかにつまらなく、それがあまりにつまらぬために自由でもなんでもないといふことを、克明に描写し証明してやること(それが小説『マダム ボヴァリー』)」「『現代日本文学の諸問題』より。全1:P59]

フローベールの夢想は、イエスの人格化「理想人間像」(絶対・全体)にあったのだと「小説の運命」他で恆存はいつてゐた。「ロマネスクな夢想(C)こそが、作品の裏がはからあのリアリスティックな無表情の記述(構図:甲)の保証に立つてゐるにほかならない」(『小説の運命II』:P611)と。又、上述の如く「**かれらの夢想してゐた自我の内容の高さと深さとに想ひいたらねばならず、その背景に発見されるものは神でなくしてなんであつたらうか**」と。

リアリズム(手段)によつていくら人間のエゴイズム(即ち自我の必然)を知り得たところで、「人間如何に生くべき」の命題である自己完成(目的)なんかには到達しないのだといふことを。又、自己喪失しかそこからは生れてこないのだといふことに彼等は「深い苦渋を味はつて」ゐたとも。

彼等は甘んじて、「十九世紀の個人主義的リアリズム(甲図)」による自我の否定にさらされながらも、「**つひに否定し扼殺しきれない個人の純粹性を発見**することを念じて」ゐたのである。(『作品のリアリティーについて』全2:P269)

実証主義(自然を、現実を正しく認識する)が到達した近代自我(個人主義)の敗北の上に、更に生き延びる、「個人の純粹性・個人的自我」と関係を保つ絶対・全体に超近代の夢を繋いだのである。「正しく生きよう」といふ夢想をそこに。

実証主義によつて顕在化したエゴイズム(我意)・権力への意志を、社会正義などといふものに潜り込ますやうな自己欺瞞(ルサンチマン=怨念の一種)をせず、それをニーチェは超人(絶対・全体)に關係性を繋いだのでは。恆存は

言ふ。「ニーチェは、神は死んだといった——が、それも、神を回復したかつたからにはほかならない。かれの憧憬と彼の現実認識との相反がかれを錯乱に導いた」と。(『近代の宿命』 P457)

そしてロレンスは、「個人主義は愛し得ない」と結論し、我意の中に存在する「吸収と奉仕：支配と被支配の法則」を認め、それを「コスモス（全体）」へと繋ぐ（「迂路を通す」）事によつて、現代人における愛の可能性を迫及したのではなからうか。二人とも「弱者の歪曲された優越意思」といふものを徹底して否定した。

そのところを恆存は、『近代の宿命』でかう書いてゐる。「確かに、人間のうちには——ヨーロッパ人の心の内部には、神に従属させておかなければじつさいどうにもならぬ領域（B）が存在する」と。(P458)。

19世紀末～20世紀初頭の以下の作家や詩人、思想化がその問題に手を触れて、そこに踏み留まったのである。

・・・フローベール又は彼等（ボードレール・ニーチェ・ドストエフスキー・ロレンス）は、実証主義（現実を正しく認識する）よりも、現実のうちに正しく生きる事の方を選んだ。即ち「現実とのかかはりにおいてみずからが真実にいようと」いふ事の方を大切だと、彼らの天賦の才で直感してゐたといふ事であらう。（「関係の真実を生かす」と同といふことか）。彼等は手段と目的を混同する過ちを冒しはしなかつたといふことだ。目的から分離した手段に否を唱え、その時代の方向性に警鐘を鳴らしたのである。（主として『作品のリアリティーについて』から）この辺はかなり難しい問題なのでは

ボードレール（原罪の消滅した「官能」(A)の迫及）について。

「その背景に発見されるものは神」。

「ボードレールの退廃的なダンディズムも虚構（アルチフイス）も、つまり自己の完成を意思する根源的な人間性（「背景に発見される神」）につながつてゐたのである。ヨーロッパの近代精神に現れるあらゆる反逆は——アンチ・クリストも悪魔主義も虚無思想も自我主義も——ことごとくがヒューマンイズムの正統に対する**逆説的な表現**にほかならない」（『横光利一』全1 p77）

（参考：吉田健一『ヨーロッパの人間』・・・手段に埋没、即ち、観念（自由・科学主義・合理主義・実証主義等）に奴隷化する野蛮な19世紀中葉を、彼等は世紀末にやうやく文明にそれを引き戻したのだ。文明とは人間の内に観念がある事であり、人間より観念が上になつて人間がその奴隷になつてしまうのが野蛮。・・・そして明治の日本は中葉の野蛮を輸入し世紀末の文明は理解できなかった。云々）

さうした「西欧近代精神の移植」はごく一部の日本人にしかなされなかつた。

「鷗外・漱石」と日本の自然主義（私小説家）との違い

恆存は言ふ。「鷗外の目標はつねに一貫してをり、そこには陰に陽にヨーロッパ流の近代的な文学概念を日本に移植することがめざされてゐた」と。P351：全二『文学史観の是正』

又、「(漱石)も本質的に同一目標をめざしてゐる事情が、容易に理解しうる」(同 P352) とも。・・・二人の中に在る「A・B」領域の峻別的姿勢。更に「鷗外・漱石の意図してゐたものは、かれらの言説のいかんにかかはらず、要するにヨーロッパ人になることであり、さらにヨーロッパ流の文学概念をすることにほかならなかつた」と。(同 P358)

そこから、以下の内容へと展開が可能となるのである。

《「ロマネスクな夢想（フローベール等）」と「封建道德の背後に道德そのものを見てゐた（漱石・鷗外）」との同一性》

フローベールの「ロマネスクな夢想（C）」こそが、作品の裏がはからあのリアリスティックな無表情の記述（構図：甲）の保証に立つてゐるにほかならない」

と言ふ文章がそのまま、評論『自己劇化と告白』で、以下の漱石・鷗外についての論考にも繋がつてゆく。即ち、

《ロマネスクな夢想＝全体・絶対（C）＝「漱石・鷗外は封建道德の背後に道德（C）そのものを見てゐた」＝敵》

と言ふ式が成り立つ。〔注：以下文の括弧及び太文字は吉野挿入〕

「自己劇化は自己より大いなるものの存在（全体・絶対：C）を前提として、はじめて存在する。自己は自己を表現しきれぬばかりでなく、自己は自己を劇化しきれない。（何を敵〔仕へる対象、即ち全体・絶対か個人か〕として選んだかによつて、そしてそれといかにたたかふかによつて、はじめて自己は表現せられる）——この意識が、われわれをしてはてしなき自己劇化に駆りやる衝動ともなり、また自己劇化からさらに脱出しようとする衝動ともなる」

（個人的自我による仕へるべき「全体」への自己劇化の衝動と、表現せられる場としての集団的自我への衝動といふことか）

此処の文章は重要である。（「自己劇化と告白」昭和27年著：全2：P415）

(別図：参照)

- ＊ 「無限定の自己」の問題・・・恆存は「無限定の自己」＝**C喪失**、といふ言葉を、ハムレットに適用し、二葉亭四迷、鷗外、漱石の明治維新後の作家たちの「実感依拠」に対してもこの問題を展開してゐる。要旨は以下のやうに。
(P555：全6『独断的な、あまりに独断的な』)

無限定の自己といふ名の、江戸幕府瓦解が招いた「規範喪失」は、二葉亭四迷、鷗外、漱石、彼ら明治人を苦しめた。彼らの人生或はその創作の主題にそれは大きく関係した。維新後の精神的空白が齎す、集団的自我上（**A**）への表現せられるべきものの不在（敵＝「全体：**C**」を喪失したが為の）に繋がったのである。それが、鷗外を歴史小説へと向かはせ、漱石をして「自己本位（私の個人主義）」の主題に結実化させていつた。「かれらは封建道德の背後に道德そのものを見てゐた」からであると。（『自己劇化と告白』P417）

そしてそれは四迷をして「国家、つまり国事に参加直接参加するといふ行動によつて、杵を失つた自己（無限定の自己）の歪みを匡さう」とさせた。上記他の評論で恆存はそのやうに述べてゐたと記憶するが。（参照：全6『独断的な、あまりに独断的な』他）
此処は難解な点だと思ふが・・・

19世紀西欧を見た二人故、さうした同じ構図（実証主義による）をもつた文学的追及を展開する事ができたのである。そして、さうでない日本の自然主義作家は、以下の歪んだ自己欺瞞の構図（**乙**）へと展開せざるを得なかつた。

即ち「**(日本の自然主義)**」作者たちから生活苦をとりのぞき、荣誉ある社会的地位を与へてやつたならば、いつたいそのうちのいくたりが文学に求道の忠実を誓つたであらうか。近代日本にあつては、文学（**B**）すらも文明開化の出世主義（**A**）のネガティブな吐け口になつてはゐなかつたか」と。

明治以来の殆どの私小説家が將に乙図の「精神主義的構図」の世界であると、恆存は『現代人の救ひといふこと』『近代日本文学の系譜』他で述べてゐる。

——此処までについての質疑応答——

~~~~~

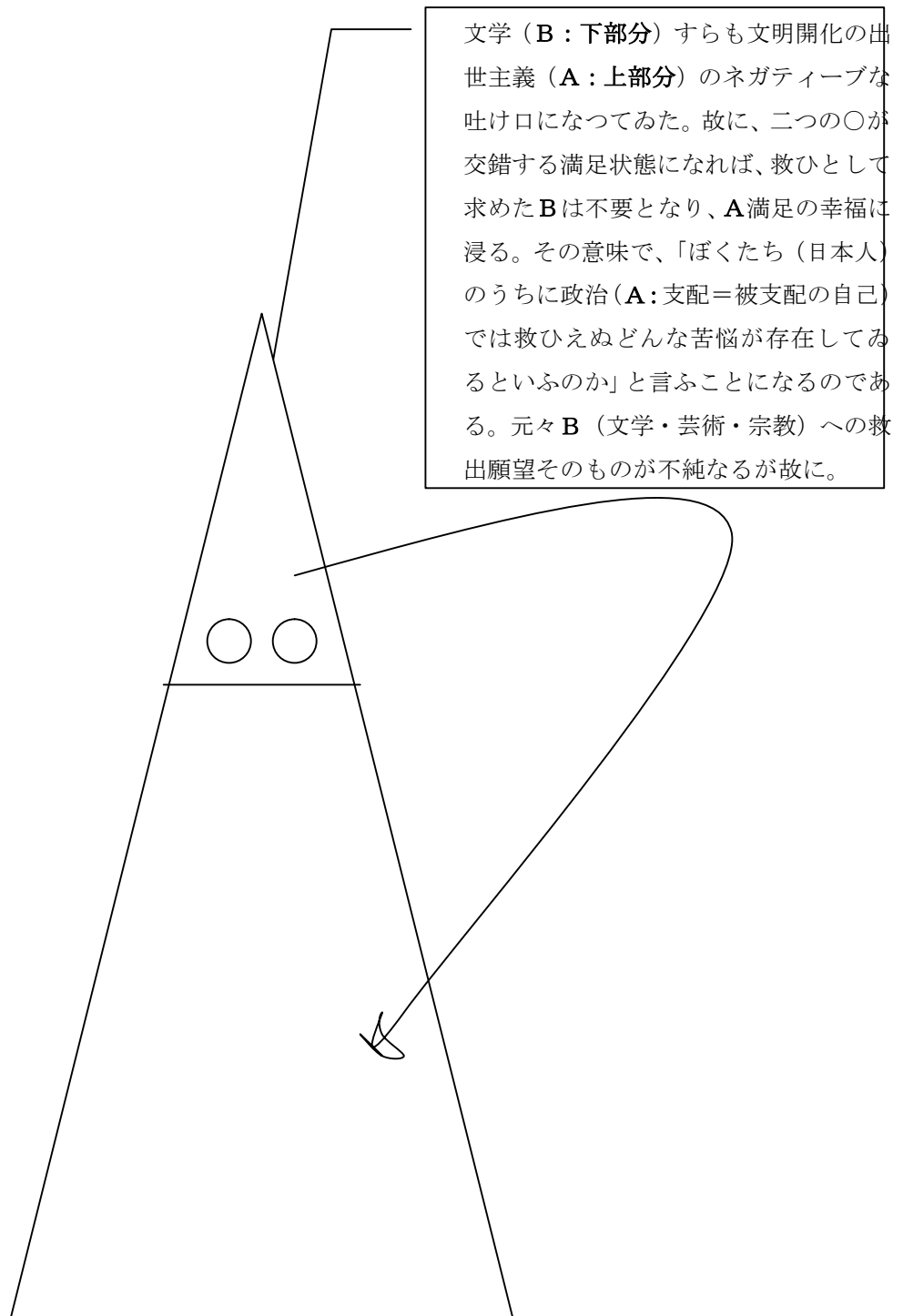
＊恆存原文を味はふ。＊P462 単 116～464：118

明治「知識人」の精神性：その「精神主義」的構図（**乙**）

（以下、括弧内は吉野注）

「この支配＝被支配の自己と個人の純粹性との混同（**A**の問題を**B**に持込む事）から起こる混濁は、たしかに近代日本文学の決定的な宿命」であつたと氏は述べてゐる。（P466）  
次頁に「乙図」自己欺瞞の構図

《以下の図の説明》上（Aの領域）の○二つは左が社会（客体）右が自己(主体)。その二者が離れてゐる、即ち不満足(非客対化)的状态。そこからB（文学・芸術・宗教）への逃げ込みが始まる。・・・「弱者の歪曲された優越意思」（ロレンス）と言ふ、洋の東西を問はぬ人間が持つ普遍的な劣勢心理。



恆存曰く。

「忠義や愛国心（相対：A 上のもの）はぼくたちの孤独を——個人の純粹性（B）を救ひうるであらうか。もしそれが不可能であるとすれば——いや、あきらかに不可能であるがゆゑに、支配＝被支配の自己からもう一つの自己に閉ぢこもつたとき、あるいは閉ぢこもらざるをえないやうに追ひつめられたとき、当時のひとびとはもはや救ひといふものをどこにも見いだせなかつたのである。ぼくたちは神なくして個人の権利を主張しえない。それをあへてなすことは悪徳である」・・・

とは、日本の資本主義は神の先導を得てないと言ふ事。故に「利己的な悪徳として発展せしめる」道が招来される結果となつた。

又、絶対（神 C）は、逆境即ち「相対的不救状況」にある個人の純粹性（B）を救ひうるが、相対（A）はそれを救ひ得ないと言ふ事。上記を含めこれらの点は難解な点だと思ふ。（例：不治の病は、医学（相対手段）では救ひ得ないが、神の愛（C）はそれを救ひうるといふ事。奇跡とか神秘的方法ではなく、「全体と精神」の問題上で）

日本ではその神の代りを文学（芸術）がおこなつた。「知識階級を救つたのが文学（神の代用）にほかならない」と恆存は言ふ。

「近代日本における文学（B）と政治（A）との乖離は、それぞれ自分の負ふべき重荷を相手に背負はせた」と。

「明治の文学は、支配＝被支配の自己（A）をもつてしては割り切れぬ個人の純粹性（B）を守るものとしてではなく、外部において抑圧された支配＝被支配の自己を曲がりなりにも生かす手段として出発したのである」

即ち、ロレンスの言ふ所の「弱者の歪曲された優越意思」が此処日本にも、しかも神が棲まぬ国ゆゑにより安易に「自己欺瞞」として發揮されてゐるのを、恆存は指摘してゐるのである。

「現実世間的に生きたかつた欲望（A）がその場で満たされなかつたためにかへつて純粹な、精神的なもの（B）にすりかへられた」と。

——此処までについての質疑応答——

基調音：「A（「支配＝被支配の自己」）・B（神に従属する自己）」二元論の歴史的展開は以上のとおり。

その他《基調音「二元論」の展開と「自己欺瞞」の問題》は

⇒ 《第一発表文》へ。

をはり